

# 現代文問題集⑦

【高校中級・第二】

## 目次

【第一問】	定義の縁	…	2ページ
【第二問】	数字の顔	…	10ページ
【第三問】	曇り硝子の向こう	…	18ページ
【第四問】	自由とは何か	…	30ページ
【第五問】	規則と裁量	…	38ページ
【第六問】	合い鍵	…	47ページ
【第七問】	条件のかたち	…	58ページ
【第八問】	見えているものの外側	…	66ページ
おわりに		…	76ページ

## 【第一問】 定義の縁

私たちは、何かを理解したと思うとき、その背後に必ず一つの定義を置いてある。定義とは、対象に境界を与える働きである。ある概念を他のものと区別し、「これはここまでである」と線を引くことによって、私たちは思考を安定させる。

たとえば「芸術」とは何かと問うとき、私たちは何らかの基準を設定する。技術の高さか、創造性か、社会的承認か。その基準を定めた瞬間、議論は前に進む。定義は混沌を整理し、対話を可能にする。もし何も定義しなければ、すべては曖昧なまま拡散し、意見はすれ違うだけだろう。

しかし、定義が境界を引くということは、同時に何かを外側へ押し出すということである。「芸術」という枠に入らないものは、非芸術として扱われる。そこでは、境界の外に置かれたものの側からの問いは、しばしば見えなくなる。定義は光を当てると同時に、影を生む。

定義の力は、その排除にあると言ってよい。境界を明確にすればするほど、内部は安定する。議論は効率化され、判断は迅速になる。だがその安定は、ある前提を固定することによって成立している。前提が固定されるとき、私たちはそれを問い直す機会を減らす。

ここで誤解してはならないのは、定義が悪であるということではない。むしろ、定義なしに思考は成立しない。言葉を用いる以上、私たちはすでに何らかの線引きを行っている。問題は、その線引きを忘れてしまうことである。

定義は思考の省略でもある。何かを定義するとは、本来ならば毎回検討すべき多様な条件を、一つの枠にまとめ上げることだからだ。その省略があるからこそ、私たちは日常的に判断を下し、議論を進めることができる。だが省略は、同時に見落としを内包する。

境界は固定されているように見えるが、実際には歴史や社会の中で変化する。「芸術」の範囲が時代によって拡張も縮小もしてきたように、定義は不変のものではな

い。それにもかかわらず、私たちは定義を一度受け入れると、それを自然なもの  
みなす傾向がある。

定義を疑うとは、対象を否定することではない。むしろ、定義がどのような前提  
に立っているかを意識することである。境界の存在を認めつつ、その外側にあるも  
のの可能性を排除しきらない態度が必要になる。

定義は、思考を前進させる装置であると同時に、思考を固定する枠でもある。そ  
の二重性を自覚するとき、私たちは初めて、定義を道具として用いることができる。  
道具は握りしめれば武器になるが、置き去りにすれば無力になる。

問題は、定義を持つことではない。定義に持たれることである。

## 設問

### 問一

本文の主張を最も精確に再構成しているものを一つ選べ。

ア 定義は思考を安定させるための装置であり、その排除性を理解することによって、より強固な概念形成が可能になる。

イ 定義は思考を可能にする枠であるが、その枠が前提を固定する働きを持つことを意識する必要がある。

ウ 定義は歴史的に変動するため、境界の設定は社会的条件に依存する。

エ 定義は排除によって内部を整えるが、その排除は議論の効率化を目的としている。

### 問二

本文の展開を最も適切に示すものを選べ。

ア 定義の有効性の確認 ↓ 排除の指摘 ↓ 必要性の再確認 ↓ 二重性の提示

イ 定義の機能提示 ↓ 省略性の説明 ↓ 歴史的変動 ↓ 定義の否定

ウ 定義の排除性 ↓ 前提固定 ↓ 思考停止 ↓ 再定義の要請

エ 定義の境界性 ↓ 内部安定 ↓ 境界解体の提案

### 問三

本文の立場から最も適切でないもの一つ選べ。

ア 定義は境界を引くことによって、思考の対象を整理する。

イ 定義は前提を固定する働きを持つが、そのことが直ちに誤りを生むわけではない。

ウ 定義は対象の外側を不可視にするため、概念の拡張を妨げる。

エ 定義は思考の成立条件であると同時に、その運用に自覚が求められる。

#### 問四

本文の立場から最も妥当でない推論を選べ。

- ア 定義は議論の効率化に資する。
- イ 定義の省略性は、判断を可能にする前提である。
- ウ 定義の排除性を自覚することは、境界外の可能性を保持する態度につながる。
- エ 定義が省略である以上、個々の判断は定義以前の状態へ戻るべきである。

#### 問五

本文において、定義が「思考の省略」であるとはどういう意味か、説明せよ。(120字程度)

#### 問六

本文の立場に立ち、「境界」の役割を再構成して説明せよ。(120字程度)

## 解答・解説

### 【全体総括】

本章は、「定義」という一見中立的で有用な思考装置の二重性を論じる抽象評論である。筆者はまず、定義が境界を与え、思考を安定させ、議論を可能にする働きを持つことを確認する。しかし同時に、境界設定は排除を伴い、前提の固定や見落としを生むことを指摘する。

重要なのは、筆者が定義を否定していない点である。定義なしに思考は成立しないと明言しつつ、その「省略性」と「排除性」を自覚せよと求める。結論は、定義を放棄せよではなく、「定義に持たれるな」という態度の問題に帰着する。

読解の核心は、

- 中心主張と補助論点の区別
  - 排除Ⅱ否定ではない点
  - 「必要だが無自覚は危険」という構造
  - 結論が規範的提案であって理論否定ではないこと
- を見抜けるかどうかにある。

### 問一

正答…イ

### 解説

- ア…排除性理解による「より強固な概念形成」は本文にない。強化方向へ寄せすぎ。  
ウ…歴史的変動は補助論点であり主張の中心ではない。  
エ…排除が「目的」とは述べていない。排除は結果。  
イ…必要性和固定性の両面を含み、最も中心に近い。

### 問二

正答…ア

本文構造は..

1. 定義の機能
2. 排除の指摘
3. 必要性の再確認（否定しない）
4. 二重性の提示
- イ.. 定義否定はしていない。
- ウ.. 思考停止や再定義の要請は明示されていない。
- エ.. 境界解体の提案はない。

### 問三

正答..ウ

- ア.. 本文通り。
- イ.. 本文と一致。
- エ.. 本文終盤と一致。
- ウ.. 「不可視にする」と断定している点が過剰。本文は“見えなくなることがある”程度。

### 問四

正答..エ

- ア.. 本文に明示あり。
- イ.. 省略⇨判断可能化は本文通り。
- ウ.. 境界外の可能性保持は終盤の趣旨に沿う。
- エ.. 定義以前に戻る提案は本文にない。放棄ではなく自覚。

### 問五

模範解答

定義とは、本来であれば対象ごとに検討すべき多様な条件や背景を一つの枠にまとめ上げ、その枠を前提として判断を進める働きを持つことを指す。つまり定義は思考を効率化するが、その効率化は検討の一部をあらかじめ省略することによって成り立っているという意味である。

#### 別解例①

定義は対象に境界を与え、その内部に共通条件を仮定することで、毎回の詳細な検討を行わずに判断を可能にする仕組みである。そのため定義は議論を進める装置となるが、同時に検討すべき多様な側面を枠外へ退けるといって省略を含んでいることを意味する。

#### 別解例②

何かを定義するとは、多様な事例を一定の基準で一括し、その基準を前提に思考を展開することである。ここでは個別事情の再確認が省かれるため、判断は迅速になるが、その迅速さは検討の簡略化に依存している。これが定義を省略と呼ぶ理由である。

#### ■自己採点チェック

- 「多様な条件をまとめる」点に触れているか
- 効率化と省略の関係を書けているか
- 単なる「短縮」説明で終わっていないか

#### 問六

#### 模範解答

境界とは、対象を他と区別し思考を安定させるための線引きであり、議論や判断を可能にする基盤である。しかしその線引きは内部を明確にする一方で外部を生み、前提を固定する働きも持つ。ゆえに境界は思考の条件でありつつ、排除と見落としを含む二重の役割を担っている。

#### 別解例①

境界は概念の範囲を定めることで思考対象を整理し、対話や判断を成立させる役割を持つ。同時に、その線引きによって外側が形成され、ある前提が固定されるため、見落としも生じうる。したがって境界は思考を支える装置でありつつ、排除を伴う枠でもある。

### 別解例②

境界とは概念に枠を与え内部を安定させる働きを指すが、その安定は外部の成立と引き換えに得られる。つまり境界は議論を可能にする条件である一方、固定化と排除を内包する構造でもある。本文はこの両義性を自覚する態度を求めている。

#### ■自己採点チェック

- 「安定」と「排除」の両面を書いているか
- 境界を否定していないか
- 二重性の構造を示せているか

## 【第二問】 数字の顔

数字はしばしば、言葉よりも雄弁である。ある商品の売上が前年より二〇パーセント伸びたと聞けば、多くの人はその商品が「支持された」と考えるだろう。ある地域で犯罪件数が減少したと聞けば、政策の効果を想像するかもしれない。数字は具体的であり、比較を可能にし、漠然とした印象に輪郭を与える。そのため私たちは、数字を前にすると、説明を得たような気分になりやすい。

しかし、数字が示しているのは、まず第一に、ある現象どうしの並び方にすぎない。たとえば、ある二つの事柄が同時に増減していることが分かったとしても、それだけで一方が他方の原因であるとはいえない。統計が示すのは相関であって、因果ではない、という言い方がここでよく用いられる。

もっとも、この区別は理解されにくい。相関が見つかり、私たちはそこに因果の筋道を読み込みたくなる。二つの変化が並んでいる以上、片方が片方を動かしているはずだと思いたくなるのである。人間の思考は、単なる同時性よりも説明を好む。並んだ出来事に対して「なぜ」を与えたいくなるのは、理解を秩序だったものにしたいためだ。

だが現実には、二つの現象の背後に、第三の要因が存在することがある。たとえば、ある地域でアイスクリームの売上と水難事故の件数がともに増えるとしても、アイスクリームが事故を増やしているとは考えにくい。ここでは気温の上昇という別の要因が、両方に影響している可能性が高い。こうした場合、表面上の相関は見えても、因果の矢印は別の方向に向いている。

さらに厄介なのは、数字が一見客観的であるがゆえに、その背後にある条件が忘れられやすいことである。どの範囲の集団を対象にしたのか、どの時期を切り取ったのか、他の条件はそろっているのか。そうした前提を確かめぬまま数値だけを受け取ると、私たちは数字を「事実の要約」ではなく、「原因の証明」のように扱ってしまう。

ここで注意すべきなのは、統計が役に立たないということではない。むしろ、統計は傾向を把握し、仮説を立てるうえで極めて有力な道具である。問題は、数字を見た瞬間に思考を終えてしまうことにある。数字は問いを閉じるためではなく、問いを開くために用いられるべきである。

ある数値の差を見つけたとき、本来必要なのは、その差がどのような条件のもとで生じたのかを考えることだ。相関は、因果の可能性を示唆しはするが、それを確定しない。数字は説明の出発点にはなっても、到着点にはならないのである。

数字に顔があるように見えるのは、私たちがそこに意味を読み込むからだ。だがその顔つきは、しばしば私たち自身の期待や不安によって形づくられている。数字を信じることと、数字に従属することとは、同じではない。

## 設問

### 問一

本文の主張を最も精確に再構成しているものを一つ選べ。

ア 統計は現象の因果関係を直接示すものではないが、適切な条件確認を伴えば、説明の出発点として有効に用いることができる。

イ 統計は相関しか示さないため、因果関係の検討には本質的に不向きであり、説明の根拠としては限定的にしか使えない。

ウ 人間は数字を客観的事実として受け取りやすいため、統計を用いる際には主観的解釈を極力排除する必要がある。

エ 相関と因果の混同は、主として統計知識の不足によって生じるため、第三要因を確認すればおおむね防ぐことができる。

### 問二

本文の立場からみて、最も妥当でないものを一つ選べ。

ア 二つの現象が同時に変化していても、それだけでは一方が他方の原因とはいえない。

イ 統計は傾向を把握し、仮説を立てるための手がかりとして用いることができる。

ウ 数字が客観的に見えるほど、その背後の条件は自動的に均一化されていると考えてよい。

エ 相関が因果の可能性を示唆することはあっても、それ自体が因果の確定にはならない。

### 問三

本文の論理展開を最も適切に示すものを一つ選べ。

ア 数字の説得力 ↓ 相関と因果の区別 ↓ 第三要因の提示 ↓ 統計の有効性と限

界

イ 数字の危険性 ↓ 統計批判 ↓ 相関の否定 ↓ 主観的判断の擁護  
ウ 相関の説明 ↓ 因果の確定 ↓ 条件確認の不要性 ↓ 数字の再評価  
エ 数字の客観性 ↓ 条件の固定 ↓ 第三要因の排除 ↓ 統計的説明の完成

#### 問四

本文において、人間が相関を因果と誤認しやすいのはなぜか。説明せよ。(130字程度)

#### 問五

本文の立場に立ち、第三要因が相関の理解において果たす役割を説明せよ。(130字前後)

## 解答・解説

### 【全体総括】

本章は、数字や統計が持つ説得力を出発点としながら、相関と因果の混同がどのように生じるかを論じる文章である。筆者はまず、数字が具体性と比較可能性によって理解を得たような感覚を与えることを示す。そのうえで、統計が直接示すのは因果ではなく相関であると区別する。

しかし筆者は、統計を否定しているのではない。むしろ、人間が説明を求める傾向ゆえに相関に因果を読み込みやすいことを指摘し、そこに第三要因や条件確認の必要性を差し込む。最終的には、統計は思考を終わらせるためでなく、問いを開くための道具だと位置づけられる。

読解の核心は、

- 相関と因果の区別
- 第三要因の機能
- 数字の「客観性」と条件依存性の関係
- 統計の有効性と限界を両立して捉えることにある。

### 問一

#### 正答…ア

#### 解説

ア…本文の中心を最も精確に再構成している。統計は因果を直接示さないが、条件確認を伴えば出発点として有効。

イ…「本質的に不向き」は言いすぎ。本文は統計を有力な道具とする。

ウ…主観排除は一部妥当だが、中心はそこではない。

エ…知識不足だけでなく、人間が説明を好む傾向そのものが論点。第三要因確認で「おおむね防げる」とも言っていない。

問二

正答…ウ

解説

ア…本文通り。

イ…本文通り。

エ…本文終盤と一致。

ウ…本文は、数字が客観的に見えるほど条件が忘れられやすいと述べる。条件が自動的に均一化されるとは言っていない。

問三

正答…ア

解説

ア…本文の流れに一致。

イ…統計批判でも主観擁護でもない。

ウ…因果の確定や条件確認不要は本文に反する。

エ…客観性から条件固定へは進まず、第三要因も排除していない。

問四

模範解答

人間は、単に二つの現象が並んでいるだけでは理解した気になれず、そこに「なぜ」という説明の筋道を与えたいからである。数字は具体的で客観的に見えやすく、その説得力によって相関が原因の証明のように受け取られやすい。理解を秩序立てたい傾向が、因果の読み込みを促すのである。

別解例①

二つの変化が同時に見える、人はその並びに意味を与えたい、一方が他方を動かしていると考えやすいからである。しかも数字は印象より確かなものに見える

ため、相関が示しているのは同時性にすぎないにもかかわらず、原因関係まで示したかのように理解されやすい。

## 別解例②

人間は出来事の単なる併存よりも、そこに因果の筋道を見いだすことで理解を完成させようとする。そのため、数字によって二つの現象の連動が可視化されると、条件確認を経ないまま因果を読み込みやすい。数字の説得力が、その誤認を一層強めるのである。

### ■自己採点チェック

- ・ 「説明を与えなくなる」人間の傾向に触れているか
- ・ 数字の説得力に言及しているか
- ・ 相関⇕同時性のレベルを書けているか

## 問五

### 模範解答

第三要因とは、相関して見える二つの現象の双方に影響を与える別の条件であり、表面上の連動をそのまま因果とみなすことを防ぐ役割を持つ。これを考慮することで、因果の矢印が一方から他方へ向いているとは限らないことが分かり、統計を条件付きで読む必要性が明確になる。

### 別解例①

第三要因は、二つの現象の背後に存在し、両者を同時に変化させる別の要素として働く。これを想定することで、表面上の相関が直接的因果を示していない可能性が見えてくる。つまり第三要因は、相関の解釈を慎重にし、条件確認の必要を示す役割を果たす。

### 別解例②

相関する二つの事柄があっても、その背後に別の要因が両方へ作用していれば、見えている連動は直接因果ではない。第三要因はこの可能性を示すことで、数字から

直ちに原因を確定する読みを抑え、統計を仮説形成の段階にとどめる働きを持つのである。

■自己採点チェック

- 「両方に影響する別条件」と書けているか
- 因果の向きの再検討に触れているか
- 条件確認の必要性まで届いているか

### 【第三問】 曇り硝子の向こう

雨は朝から降っていたが、正午を過ぎるころには、降っているというより空気の中に溶けているような細かきになっていた。駅前再開発で新しく建った市民センターは、外壁の色がまだ若く、濡れたコンクリートの匂いにも新品の気配が残っている。真鍋は傘をたたみ、入口脇の傘立てに差し込んだ。番号札は受け取らなかつた。取ったところで、帰るころにはどれが自分のものか分からなくなる気がしたからである。

三階の会議室では、「地域の記録を残す会」と題した催しが開かれていた。近くの商店街や駅前の変化について、古い写真や聞き書きを持ち寄り、冊子にまとめようという企画である。真鍋は、町内会の回覧でそのことを知った。行こうと決めたのは昨夜で、決めた理由は、自分でもうまく説明できない。ただ、押し入れの奥から昔の駅前商店街の写真が数枚出てきて、その裏に母の字で小さく日付が書いてあったのを見たとき、捨てるよりは持っていったほうがよいと思っただけである。

会議室の前には長机が置かれ、参加者名簿とボールペン、それに「資料はお帰りの際にご返却いたします」と書かれた紙が並んでいた。受付に座っていた若い女性が顔を上げ、「参加ですか」と聞いた。真鍋はうなずき、苗字だけを書いた。住所を書く欄もあったが、そこは空けたままにした。女性は何も言わなかった。

会場には、すでに十人ほどがいた。壁際に古い地図が掲げられ、窓の近くにはパネルが立てかけてある。真鍋は一番後ろの席に座った。前の方に、年配の男性が二人並んで腰を下ろし、再開発前の通りの名前について小声で言い合っていた。その言い方には、知識を競っているのではなく、相手の記憶の縁を少しずつ確かめているような慎重さがあった。

司会は、市役所の文化振興課に勤めているらしい片桐という男だった。四十代半ばほどで、紺色のジャケットの袖口だけが少し擦れている。片桐は配布資料を揃えながら、予定より五分遅れて始めます、と言った。その「予定より五分遅れて」が、

会の進行を詫げる言葉なのか、それとも自分自身を整えるための時間稼ぎなのか、真鍋には分からなかった。

会は、各自が持参した資料を簡単に紹介するところから始まった。古い商店街の地図、祭りのチラシ、昭和のころの集合写真。皆、自分の持ってきたものについて、必要以上に語ろうとはしなかった。話し始めれば長くなることを、誰もがどこかで知っているように見えた。

真鍋の番が来る前に、ひとりの女性が前へ出た。灰色のカーディガンを着て、髪を後ろでゆるく束ねている。名簿には「石田」と書いてあった気がする。彼女は茶封筒から写真を一枚ずつ取り出し、机の上に並べた。

「父が撮っていたものです。駅の南口が、まだ広場になる前の」

その声を聞いたとき、真鍋は一度だけ顔を上げ、それからまたすぐに資料へ視線を落とした。聞き覚えがある、と思ったのではない。ただ、その声が、何かを思い出しかけたときの感覚に似ていたのである。思い出したのではなく、思い出しかけた。その違いは、真鍋にとって大きかった。

女性は、写真の一枚を手にとって、「これはたぶん、昭和六十三年です」と言った。その「たぶん」が自然だった。正確さを装うための保留ではなく、記憶を乱暴に確定しないための言葉に聞こえた。

真鍋は、自分の鞆の中にある写真の束を思い出した。裏書きの日付のうち、二枚は母の字で、残り一枚は自分が昔あとから書き加えたものである。どれも絶対に正しいとは言い切れない。にもかかわらず、紙に書かれた年号は人を妙に安心させる。やがて真鍋の番になった。彼は写真を三枚だけ机に置いた。駅前のアークード、青果店の看板、夏祭りの提灯。片桐が「どのあたりで撮られたものか分かりますか」と聞いた。真鍋は少し迷ってから、「このあたりだと思います」と言い、配布された地図の端を指で押さえた。

「撮ったのはお母さまですか」

片桐は写真の裏を見て尋ねた。

「いえ、たぶん父です。書いたのは母ですけど」

真鍋はそう言ってから、自分が「たぶん」と言ったことに少し驚いた。普段の彼は、仕事でも私生活でも、曖昧な言い方をあまり好まない。分からなければ分からないと言うし、分かるなら分かると言う。そういうふうにしてきたはずだった。だが、その場では、「たぶん」がもつとも正確な気がした。

石田という名前の女性が、その写真の一枚をのぞき込み、「この八百屋さん、覚えています」と言った。

真鍋は顔を上げた。女性もこちらを見た。目が合ったのは一瞬で、互いにすぐ外した。

「二階にピアノ教室、ありましたよね」

彼女は写真の端を指した。

真鍋は、答えるまでにわずかな間を置いた。

「ありました」

そのあとに続く言葉はいくつかあったはずだ。自分も通っていたこと。通っていたというより、通わされていたこと。教室の窓から商店街の屋根が見えたこと。雨の日だけ階段が妙に暗かったこと。だが、彼はどれも言わなかった。

会の後半は、冊子の構成案についての話し合いになった。「失われた風景」という章立ては少し大げさではないか、と誰かが言い、「変わってきた町並み」くらいがよいのではないかと別の誰かが言った。片桐はメモを取りながら、どちらにもはっきり賛成しなかった。

その議論のあいだ、真鍋は二度ほど、自分の右斜め前に座っている石田の横顔を見た。見た、見た、というより視線が行った。横顔は、正面から見ればまったく違って見える種類のものである。人は横顔に、つい説明を与えたくなくなる。だが説明の大半は、たいてい自分の側に属している。

休憩のとき、紙コップに入ったぬるいお茶が配られた。真鍋は窓際でそれを飲んだ。窓ガラスは曇っていて、外の景色は輪郭を失っている。駐車場の白線だけが、

かろうじて湿った光の中に浮いていた。

「昔、このへんに文房具屋、ありましたよね」

背後から声がした。石田だった。

真鍋は振り向いた。

「駅の北口へ抜ける途中の」

「ええ」

「ありましたね」

それだけ言って、真鍋は紙コップを持ち直した。石田もそれ以上は続けなかった。気まづさはなかった。だが、気まづさがないことが、かえって会話を短くしたようにも思えた。

「もう全然、違う町みたいですね」

石田は窓の方を見たまま言った。

真鍋は、その言葉にすぐ返事をしなかった。違う町、というのは、おそらく正しい。だが何と比べて違うのかは、人によって違うはずだった。自分の子どもころと比べるのか、十年前と比べるのか、それとも、今ここに立っている自分の記憶と比べるのか。

「そうですね」

彼は結局、そう答えた。

会が終わるころには、雨はほとんど上がっていた。参加者たちは、写真や地図を封筒に戻しながら、次回の日程を確認していた。片桐は出口のそばに立ち、「本日はありがとうございました」と一人ひとりに言った。その声は最初より少しなめらかになっていったが、それが会の成功によるものか、単に終わりが見えた安堵によるものかは分からなかった。

真鍋は傘立てから自分の傘を取り出した。よく似た黒い傘が何本も残っていて、一瞬ためらったが、持ち手の小さな擦り傷ですぐ見分けがついた。

外へ出ると、石田が玄関脇で空を見ていた。傘は閉じたまま手に持っている。真

鍋は彼女の横を通り過ぎかけ、それから足を止めた。

「さっきの写真ですけど」

自分でも、何を言おうとしているのか定まらない声だった。

「八百屋の上のピアノ教室、僕も通ってました」

石田は少し目を見開いた。驚いたようにも見え、そうでもないようにも見えた。

「そうだったんですか」

「ええ。短いあいだですけど」

真鍋はそこで黙った。石田が何か思い出すことを期待したのかもしれないし、そうではなかったのかもしれない。自分でも分からなかった。

石田は微笑んだ。その微笑みは、思い出した人の顔というより、思い出せないことをそのまま受け入れるときの顔に近かった。

「私は見学だけで、結局通わなかったんです」

彼女はそう言った。

真鍋は、なぜかその言葉に納得した。納得した理由は説明できなかった。説明しようとする、どこかで作り話になる気がした。

「そうですか」

とだけ言った。

信号が変わり、交差点の向こうで車が一齐に動き出した。石田は会釈して、駅の方へ歩いていった。真鍋はその後ろ姿を少し見送り、それから反対の道へ向かった。数歩進んだところで、封筒の中の写真の角が鞆の内側に当たる感触がした。

次回も来るかどうか、彼はまだ決めていなかった。

ただ、決めていないということだけが、今日は妙にはっきりしていた。

## 設問

### 問一

本文の内容に照らして、真鍋と石田の関係の描かれ方を最も適切に説明しているものを一つ選べ。

ア 両者は互いを過去の記憶と結びつけながらも、その記憶を確定的な再会として扱うことを避けている。

イ 両者は明確な面識を持っていたが、そのことを口にすることによって現在の場が不自然になるのを恐れている。

ウ 両者は共通の場所に関する記憶を共有しているが、それを個人的経験へ深めることには慎重である。

エ 両者は地域の記録という公的な目的のもとで接しているにすぎず、個人的な関心は本文の中心ではない。

### 問二

本文中の「たぶん」という語の働きについて、最も精確なものを一つ選べ。

ア 記憶の不確かさを示すだけでなく、断定によって記憶を乱暴に固定しないための態度を表している。

イ 資料の信頼性に対する不安を示し、真鍋が地域の記録という営みそのものに懐疑的であることを表している。

ウ 発言の責任を弱めるための表現であり、真鍋も石田も個人的記憶に深く関わることを避けようとしている。

エ 記憶の曖昧さを補うための便宜的な語であり、本文ではそれ以上の意味を担っていない。

### 問三

本文の叙述に関する理解として、最も適切でないものを一つ選べ。

ア 真鍋は石田の声に対して、はっきりと思い出したとは言わず、「思い出しかけた」という未確定な感覚として受け止めている。

イ 真鍋は片桐の発言や石田の微笑みに対して、その意味を断定せず複数の可能性を残して受け取っている。

ウ 真鍋は自分の感じたことと相手の意図とを明確に区別しており、推測を事実のように扱うことはほとんどない。

エ 本文では、見たこと・聞いたことよりも、それに対して真鍋がどのように意味を与えるかがしばしば前景化されている。

#### 問四

結末の「次回も来るかどうか、彼はまだ決めていなかった。ただ、決めていないということだけが、今日は妙にはっきりしていた。」の理解として最も適切なものを一つ選べ。

ア 真鍋は石田との再会を望みながらも、それを自覚することを避けるために判断を保留している。

イ 真鍋は会への参加理由を明確に言語化できないまま、今日の出来事によって自分の内に動きが生じたことだけを自覚している。

ウ 真鍋は地域の記録活動に対して主体的に関わる決意を固めつつあり、その前段階として逡巡を描かれている。

エ 真鍋は石田との会話に特別な意味を見出していないが、会自体の有用性を判断しかねて結論を先延ばしにしている。

#### 問五

本文において、真鍋が曖昧な言い回しを受け入れるように見えるのはなぜか。石田の発言や自分自身の応答に触れながら説明せよ。(130字程度)

## 問六

本文では、会話がしばしば短く終わる。真鍋と石田のやり取りが長く続かないことには、どのような意味があるか説明せよ。(150字程度)

## 解答・解説

### 【全体総括】

本章は、地域の記録を残すという公的な場を舞台にしながら、真鍋という人物が記憶や他者との接触をどのように受け止めるかを、きわめて抑制的に描いた物語である。大きな事件は起こらず、会話も短い。だが、その短さや曖昧さそのものが本章の核心となっている。

真鍋は、石田の声や古い写真に触れながらも、記憶を断定的に扱おうとしない。「思い出した」のではなく「思い出しかけた」と感じ、「たぶん」という語を自然に用いるようになる。この変化は、記憶や過去を一つの確かな物語へ固定せず、その揺らぎを受け入れ始めていることを示している。

また、片桐の言い方や石田の微笑みについても、本文は意味を一つに決めない。真鍋は見聞きしたことに意味を与えようとするが、その意味づけは常に未確定のまま残される。したがって本章では、事実と推測、記憶と解釈の境目を丁寧にたどることが求められる。

読解のポイントは、

- 「共有された記憶」と「確定的な再会」との違い
- 「たぶん」が示す態度の変化
- 会話が短く終わることの含意
- 終盤の「決めていない」が単なる優柔不断ではないことを捉えられるかどうかにある。

### 問一

#### 正答…ウ

アはかなり近いが、「互いを過去の記憶と結びつけながらも」という部分がやや強い。真鍋側はそう読めるが、石田側についてはそこまで確定できない。

イは「明確な面識を持っていた」が言いすぎである。本文はそこを意図的に曖昧に

している。

エは誤りではない要素を含むが、個人的な関心は明らかに本文の中心に入っている。  
ウは、共通の場所の記憶はあるが、それを直ちに個人的な過去へ深めないという本文の抑制を最もよく表している。

## 問二

正答…ア

アが最も精確。石田の「たぶん」は、単なる不確かさでなく、記憶を乱暴に確定しないための言葉として描かれているし、真鍋もそれを受けて自分の発言に「たぶん」を用いる。

イは、資料や記録活動そのものへの懐疑とまでは言えない。

ウは「責任を弱める」が中心になっており、本文の繊細さを取りこぼす。

エは「それ以上の意味を担っていない」が誤り。

## 問三

正答…ウ

アは本文通り。

イも本文通りで、片桐の発言や石田の微笑みについて真鍋は複数の解釈可能性を残している。

エも本文の叙述の特徴をよく捉えている。

ウは不適切。真鍋はむしろ、見聞きしたことに対して自分の推測や意味づけを重ねており、事実と解釈を常に明確に分けているわけではない。

## 問四

正答…イ

アは近く見えるが、「石田との再会を望みながら」が強すぎる。そこまでは確定でき

ない。

ウは「主体的に関わる決意を固めつつあり」が先走っている。

エは石田との会話の意味を過小評価している。

イが最も適切で、真鍋は理由を明確に言語化できないまま、今日の出来事が自分に何かをもたらしたことだけを自覚している。

## 問五

### 模範解答

石田の「たぶん」は、記憶の不確かさを隠すのではなく、記憶を無理に確定しないための自然な言葉として真鍋に受け取られた。そのため真鍋も、父が撮った写真について「たぶん」と言い、自分の記憶や由来を断定しない方がむしろ正確だと感じる。曖昧さを不確かさでなく誠実さとして受け入れ始めたのである。

### 別解例①

真鍋はもともと曖昧な言い方を好まないが、石田の「たぶん」が記憶を乱暴に固定しないための言葉として自然に響いたことで、その場では断定しないことのほうが適切だと感じた。自分の写真の由来についても同様に、確かさよりも記憶への慎重な向き合い方を優先するようになったからである。

### 別解例②

石田の発言を通じて真鍋は、古い写真や記憶には完全に言い切れない部分があるのに、年号や由来は人を妙に安心させることを意識する。そこで彼は、自分の応答でも「たぶん」を用い、曖昧さを避けるのではなく、それを含んだまま語るこのほうがこの場にふさわしいと感じたと読める。

### ■自己採点チェック

- 石田の「たぶん」と真鍋自身の「たぶん」をつなげているか
- 曖昧さを単なる不確かさとして処理していないか
- 「誠実さ」や「慎重さ」の方向に届いているか

## 問六

### 模範解答

真鍋と石田の会話が早く終わるのは、互いに共有できる記憶の気配はありながら、それをただちに個人的な物語へと広げようとしていないからである。長く語れば過去を確定的に整理してしまうが、短いやり取りのままにとどめることで、記憶の曖昧さや相手との距離が保たれる。したがって短さは関係の浅さではなく、拙速な確定を避ける抑制として働いている。

### 別解例①

会話の短さは、互いに話題を欠いているからではなく、共通するものがあるからこそ、それ以上を急いで言葉にしない態度を示している。過去の記憶や町の変化をめぐる感覚は共有されていても、それを明確な再会や親密さへ結びつけることは避けられている。早く終わることによって、未確定な関係のまま成立している静かな接触が保たれているのである。

### 別解例②

本文では会話が長引かないことで、真鍋と石田のあいだにあるものが「話せない」のではなく「話し切らない」性質を持つことが示される。個人的経験へ踏み込めば記憶や関係に過剰な意味づけが生じかねないため、両者は短い言葉の中で共通の感覚だけを確かめている。短さはむしろ、曖昧さを壊さないための慎重さを表している。

### ■自己採点チェック

- 会話の短さを「関係の浅さ」だけで説明していないか
- 過去や記憶を確定しないことと結びつけているか
- 「抑制」「慎重さ」「未確定性」のどれかに届いているか

#### 【第四問】 自由とは何か

##### 文章 A

自由とは、単に外から妨げられていない状態を指すのではない。たしかに、人が何かをしようとするとき、過度な強制や抑圧があれば自由は損なわれる。しかし、妨げがないだけで自由が成立するわけではない。何を選び、なぜそれを選ぶのかを自分で引き受けてはじめて、その行為は自由なものとなる。

たとえば、いくつもの進路が目の前に開かれている人がいるとする。その人は誰からも命令されておらず、表面上は十分に自由に見える。だが、もし本人がその選択の意味を考えず、ただ周囲の流れや気分を押されて決めていいるなら、その決定は自由であるとは言いがたい。選択肢の多さそのものは、自由の保証にはならないからである。

自由にとって重要なのは、選ぶことそれ自体よりも、選んだことを自分のものとして引き受けることである。選択にはつねに結果が伴う。ある道を選べば、別の道は選ばれないまま残る。自由とは、その不可逆性を含めて、自分の決定を自分で背負うことを意味する。責任を回避したまま自由だけを求めるなら、それは結局、気ままさと大きく変わらない。

むしろ、私たちはいつも十分な情報を持って選べるわけではない。迷いもあれば、見通しの誤りもある。だが、それでもなお選ぶほかない場面がある。むしろそのとき、自分の不確かさを含めて決断することに、自由の核心がある。确实だから選ぶのではない。确实ではないにもかかわらず、自分で選ぶところに、自由は成立する。したがって自由とは、何ものにも縛られない宙ぶりの状態ではない。むしろ、複数の可能性の中から一つを選び、その選択の結果に自分を結びつけることによって成立する。自由とは軽さではなく、みずからの行為に重みを与える仕方なのである。

##### 文章 B

自由を、何かを自分で選び取る力としてのみ考えるとき、私たちはしばしば自由

を過度に意志の問題へ還元してしまう。もちろん、自分で決めることは大切である。しかし、人がほんとうに自由にふるまっていると感じられる瞬間は、かえって「決めよう」と力んでいるときよりも、無理な作為が薄れ、身体や状況に応じて自然に動いているときに訪れることがある。

たとえば、よく慣れた仕事をしているとき、人は一つ一つの動作を意識的に命令しているわけではない。手は必要なものへ伸び、目は先に起こることを見越し、身体は無理なく応じる。そのあり方を単に習慣と呼ぶこともできるだろう。だがそこには、外から押しつけられたぎこちなさではなく、その人がその人として動いている自然さがある。自由とは、こうした自然な一致のうちに現れる面を持つ。

このとき自由は、「私は自由である」と強く意識されるものではない。むしろ、自由を確保しようとして自分を見張りすぎるとき、人はかえって固くなる。あれも可能、これも可能と選択肢ばかりを数え上げると、身体は動きを失い、状況との呼吸は乱れる。自由は選択肢の多さから生まれるというより、自分と状況とのあいだに無理な摩擦がないところで、ふと立ち現れるのである。

もちろん、ここでいう自然さは、ただ流れに身を任せることとは違う。惰性や無関心まで自由と呼ぶことはできない。自由が自然に現れるためには、その人の経験や鍛錬、周囲との関係の積み重ねが要る。つまり自由とは、意志によって一から作られるというより、十分に生きられた関係の中から、結果としておのずから現れてくるものだと言える。

したがって自由とは、まず強く選び取ることによって獲得されるというより、選ぼうとする意志が過剰に自己を固めなくなったとき、はじめて現れる余裕に近い。自由とは、自分だけで立つ力というより、自分が置かれた世界の中で無理なく息をしている状態なのである。

## 設問

### 問一

文章A・Bの両方に共通する立場として最も適切なものを一つ選べ。

ア 自由とは、外的拘束が少ないほど自動的に成立する状態である。

イ 自由とは、単に選択肢が多いことや妨げが少ないことだけでは十分に説明できない。

ウ 自由とは、意志によって選択を確定することでのみ成立する。

エ 自由とは、状況への適応が自然に起こるかぎり、責任を問わず成立する。

### 問二

文章Aと文章Bの相違を最も精確に表しているものを一つ選べ。

ア Aは自由を選択の結果に対する引き受けに見るのに対し、Bは自由を作為の薄れた自然な一致のうちに見る。

イ Aは自由を個人の内面に限定して考えるのに対し、Bは自由を社会制度の問題として考えている。

ウ Aは自由を責任と結びつけるが、Bは自由を責任から切り離して考えている。

エ Aは自由を不確実性の克服として捉えるのに対し、Bは自由を不確実性の受容として捉える。

### 問三

文章Bの立場から文章Aに向けられうる批判として最も適切なものを一つ選べ。

ア Aは選択の重みを強調するあまり、自由が意志によって作り出されるものだと捉えすぎ、かえって自己を固める危険を見落としている。

イ Aは外的拘束の問題を過大評価し、自由を制度的保障だけに還元している。

ウ Aは責任を重視するあまり、選択肢の存在そのものを否定している。

エ ヌは自由を偶然に委ねることで、主体的決断を回避している。

#### 問四

文章 A・B の理解として最も適切でないものを一つ選べ。

ア A では、自由は選択の不可逆性を含めて自分の決定を背負うところに成立する。  
イ B では、自由は選択肢を一つずつ意識的に検討することによって最も確実に実現すると考えられている。

ウ A・B ともに、自由を単なる気ままさや惰性と区別しようとしている。

エ A では、自然さは無関心や放任と同一ではなく、経験や関係の積み重ねを要するものとされる。

#### 問五

文章 ヲにおける「選ぶ」と、文章 B における「おのずから現れる」とは、自由の成立をどのように異なる形で捉えているか。両者の違いを中心に説明せよ。(140 字程度)

#### 問六

文章 A・B はいずれも自由を、単なる「気ままさ」や「惰性」とは区別している。両者の立場を踏まえ、その区別の仕方を説明せよ。(150 字前後)

## 解答・解説

### 【全体総括】

本章は、「自由」という同じ語を扱いながら、その成立のしかたを異なる方向から捉えた二つの文章を比較する章である。文章Aは、自由を自己決定とその結果の引き受けに結びつけ、選択の不可逆性を背負うところに自由の重みを見る。これに対して文章Bは、自由を過剰な意志の働きによって作られるものとは考えず、身体や状況との摩擦が薄れたところに自然に現れるものとして捉える。

ただし、両者は単純な対立ではない。どちらも自由を放縦や無責任とは区別し、外的拘束の不在や選択肢の多さだけでは不十分だと考えている。差異は、自由を成立させる中心を、Aが「引き受け」に置くのに対し、Bが「自然な一致」に置くところにある。

読解の核心は、

- 共通点を広げすぎずに把握すること
- AとBの相違を「責任の有無」などの単純な対立にしないこと
- Bが自由を惰性や放任と区別している点を見落とさないこと
- 「選ぶ」と「現れる」が指す自由の成立条件の差を言語化することにある。

### 問一

正答…イ

### 解説

ア…両者とも、外的拘束の少なさだけで自由が成立するとは考えていない。

ウ…これはAには近いが、Bは自由を意志的選択だけに還元しない。

エ…Aにも合わない。Bは惰性や無関心を自由と同一視しない。

イが最も適切で、A・Bとも「選択肢の多さ」や「妨げの少なさ」だけでは自由は説明できないとしている。

## 問二

正答…ア

### 解説

アがもっとも精確。△では自由は「選び、その結果を自分のものとして引き受けること」に成立する。他方□では、自由は「無理な作為が薄れ、身体や状況との自然な一致のうちに現れるもの」とされる。

イ…Bは制度論ではない。

ウ…Bは責任を否定していない。ただ自由の成立を「責任」中心に語っていないだけ。

エ…△は不確実性の克服より、不確実であっても選ぶことを重視する。

## 問三

正答…ア

### 解説

Bの立場から△を批判するなら、「選ぶ」「引き受ける」を強調するあまり、意志が過剰に自己を固めてしまい、自由の自然な現れを妨げるという方向になる。

イ…△は制度保障だけに還元していない。

ウ…△は選択肢の存在を否定していない。むしろそれだけでは自由にならないと言っている。

エ…これはむしろAからBへの批判に近い。

## 問四

正答…イ

### 解説

ア…文章△の内容そのもの。

ウ…両者に共通する。

エ…文章Bの核心の一つ。

イが不適切。文章Bはむしろ、選択肢を一つずつ意識しすぎると身体が固くなり、自由が損なわれると述べている。

## 問五

### 模範解答

文章Aでは、自由は複数の可能性の中から自ら決断し、その結果を引き受けることで成立する。したがって中心にあるのは主体の選択と責任である。これに対し文章Bでは、自由は意志で強く選び取ることで作られるというより、過剰な作為が薄れ、身体や状況との無理のない一致の中で自然に現れるものとして捉えられている。

### 別解例①

Aにおける自由は、不確実でもなお自分で選び、その不可逆な結果を背負うことにあるため、選択行為そのものが核心となる。他方Bでは、自由は選び取る意志の強さにあるのではなく、自己を固めすぎず、経験や関係の積み重ねの中で自然に動ける状態として立ち現れる。両者は自由の成立契機を異なっており捉えている。

### 別解例②

文章Aは、自由を「自分で決め、その決定を自分のものとして引き受けること」と見るため、自由は主体の決断によって成立する。他方文章Bは、自由を「決めようと力むこと」から距離を取り、作為の薄れた自然な動きの中に見出す。つまりAは決断の重み、Bは無理のない一致を自由の中心に置いている。

### ■自己採点チェック

- Aを「選択と引き受け」で説明できているか
- Bを「自然な一致」「作為の薄れ」で説明できているか
- どちらか一方だけに偏っていないか

## 問六

## 模範解答

文章Aでは、自由は単に好きなように振る舞うことではなく、選択の結果を自分で背負うところに成立するため、責任を回避した気ままさとは区別される。文章Bでも、自由はただ流れに任せる惰性ではなく、経験や鍛錬、関係の積み重ねの中で自然に現れるものとされる。したがって両者はともに、無責任さや無関心を自由とは認めず、その成立に一定の深さを要求している。

### 別解例①

Aは、自由を複数の可能性からの決断とその引き受けに置いたため、結果から逃げ気ままさを自由とみなさない。他方Bは、自然さを強調しつつも、それを惰性や放任とは区別しており、十分に生きられた関係や経験の蓄積を条件にしている。つまり両者とも、自由を単なる軽さではなく、行為や生のあり方の厚みと結びつけている。

### 別解例②

文章Aにおいて自由は、自分で選び、その選択に重みを与えることで成立するため、責任を伴わない気ままさとは異なる。文章Bでは、自由は自然に現れるものだが、それは無関心のまま流されることではなく、身体と状況が無理なく応じる熟した状態を指す。両者は方法は異なるが、自由を浅い放縦から切り離している点で共通している。

### ■自己採点チェック

- Aで「責任」や「引き受け」に触れているか
- Bで「惰性ではない自然さ」を説明できているか
- 両者の共通点までまとめられているか

## 【第五問】 規則と裁量

### 資料 A

制度が制度として機能するためには、まず何よりも、判断の基準があらかじめ示されていなければならない。人はしばしば、規則を硬直的なものとして語る。たしかに、個別の事情だけを見れば、規則の適用が冷たく見える場面はある。しかし、規則の意義は、まさにその「冷たさ」にある。誰に対しても同じ基準をあらかじめ示し、その基準に従って判断することによって、制度は恣意を抑え、予測可能性を確保するのである。

もし規則がその都度の事情によって容易に揺らぐならば、人は制度を信頼できなくなる。ある者には例外が認められ、別の者には認められないという状況が繰り返されれば、制度の内側にいる人々は「何が正しいか」ではなく、「誰がうまく説明できるか」「誰が声を届けやすいか」によって結果が変わると感じるだろう。そうなれば、制度は公平の装置ではなく、交渉の巧拙を競う場へと変質してしまう。

公平とは、個別事情を十分に汲み取るのではなく、まず同種の事案を同様に扱うことによって成立する。もちろん、すべての事情を事前に規則へ織り込むことはできない。だがそれは、規則の外で自由に判断してよいということの意味しない。むしろ、例外が必要であるなら、その例外条件自体を規則の側へ組み込み、誰にとっても見える形で運用しなければならない。

制度は、個々人の善意に支えられるべきではない。善意は貴いが、可視化されず、再現されず、検証もしにくい。ある窓口担当者が親切であったから救われた、という経験は、その場では望ましいかもしれない。しかし制度は、その親切な担当者がいなくても同じ結果を出せるものでなければならない。さもなければ、助けを得られた人と得られなかった人との差は、制度上の差ではなく、偶然の差として残る。

ここで重要なのは、規則が現実の複雑さを無視している、という批判がしばしば半ば正しく、半ば誤っていることである。規則はたしかに現実を単純化する。しかし、その単純化があるからこそ、制度は個別の顔ぶれから切り離されて機能する。

個別事情を過不足なく判断しようとするれば、制度はむしろ不透明になる。判断の理由が複雑になるほど、外からその妥当性を点検することは難しくなるからである。

規則の厳格さは、弱い立場の者を守る面も持つ。声の大きい者、交渉に長けた者、感情を強く訴えられる者は、個別事情の重視が進むほど有利になりやすい。逆に、自分の困難をうまく言葉にできない者は、裁量的判断の場で不利を被る可能性がある。規則があることは、そうした非対称を和らげる働きを持つ。

したがって、制度の公平を支える中心は、個別事案ごとの納得感ではなく、運用可能で公開された基準にある。規則は不完全である。だがその不完全さを理由に規則の外へ安易に出ることは、制度をより人間的にするのではなく、むしろ見えにくい不公平を増やす危険を伴う。制度に求められるのは、例外なき硬直ではない。例外をもまた可視化された規則へと回収し続ける努力なのである。

## 資料B

制度が公平であるとは、同じ規則を同じように適用することだ、としばしば言われる。この考え方には強い説得力がある。だが、すべての人が同じ地点から制度に向き合っているわけではないとき、形式的に同じ扱いをすることは、かえって結果としての不均衡を拡大することがある。規則の一律運用は、表面上の平等と引き換えに、背景事情の差を見えなくする可能性を持つ。

たとえば、申請期限を一日でも過ぎれば一律に受理しないという運用は、たしかに明快である。しかし、情報へのアクセス、支援者の有無、日本語能力、障害や病気の状況などによって、同じ期限が持つ重みは人によって異なる。制度の目的が単なる事務処理の効率ではなく、必要な人へ適切な支援を届けることにあるなら、期限という規則は、その目的に照らして解釈されるべきである。

ここでいう裁量は、担当者の気分や好みによる判断を意味しない。むしろ裁量とは、規則の目的を見失わず、個々の事情を理由づけ可能な形で読み込む能力のことである。良い裁量とは、規則から離れることではなく、規則が何のためにあるかを

具体的事案において考え抜くことである。

規則は一般的であるがゆえに、多様な現実を事前に書き尽くすことができない。だからこそ、制度の運用にはつねに解釈が入り込む。条文の文言をそのまま適用しているように見える場合でさえ、何を「同種の事案」とみなすか、どの事情を本質的とみなすかという判断が避けられるわけではない。裁量は規則の外にあるのではなく、規則の内部にすでに含まれている。

また、個別事情への応答を単なる例外処理として捉えるのも不十分である。なぜなら、ある人々に繰り返し生じる困難が見えているなら、それはもはや「偶発的な例外」ではなく、制度設計そのものが想定していない現実の存在を示しているからである。制度は例外をただ例外として排除するのではなく、その例外が何を告げているかを読み取らなければならない。

もちろん、裁量が濫用されれば不透明さが生じる。理由の示されない個別判断は、不信を招くだろう。だから必要なのは、裁量をなくすことではなく、裁量の理由を記録し、共有し、検証可能にすることである。規則が公開されるべきであるのと同様に、裁量もまた公開可能な言葉を持たなければならない。

公平とは、すべての人を同じように扱うことではなく、制度の目的に照らして必要な違いを見分けることでもある。ここで求められるのは、感情的な同情ではない。規則が想定した標準的な利用者像からこぼれ落ちる人々を、制度の側がどこまで見ようとするかという問いである。

したがって、制度の信頼は、規則の一律性だけから生まれるのではない。規則の目的を忘れず、現実の差異に応答しうる柔軟さを備えているとき、制度ははじめて実質的な公平に近づく。裁量は規則の敵ではない。むしろ、規則が自らの目的へ忠実であるために必要な、もう一つの条件なのである。

## 設問

### 問一

資料A・Bの両方に共通する立場として最も適切なものを一つ選べ。

ア 制度の公平は、担当者の善意や感情に依存せず、公開可能な基準または理由に支えられるべきである。

イ 制度の公平は、個別事情をできるだけ多く取り込むことで達成される。

ウ 制度の信頼は、例外を認めない一律運用によってのみ成立する。

エ 制度の目的は、個別事案ごとの納得感を最大化することにある。

### 問二

資料Aと資料Bの相違を最も精確に表しているものを一つ選べ。

ア Aは公平の中心を事前に公開された規則の一貫運用に置き、Bは公平の中心を制度目的に照らした差異への応答に置く。

イ Aは規則を絶対視して裁量を否定し、Bは裁量を重視して規則を補助的なものとみなす。

ウ Aは制度の目的を効率に限定し、Bは制度の目的を支援に限定している。

エ Aは形式的平等を重視するが、Bは形式的平等そのものを不公平の原因として否定している。

### 問三

資料Bの立場から資料Aに向けられうる批判として最も適切なものを一つ選べ。

ア Aは同種の事案を同様に扱うことを重視するあまり、そもそも何を同種とみなすかに解釈が介在することを十分に扱っていない。

イ Aは例外を規則へ組み込む必要を否定し、制度の透明性を軽視している。

ウ Aは弱い立場の者の保護を全面的に担当者の善意へ委ねている。

エ Aは個別事情の存在そのものを制度運用における誤差としてしか見ていない。

#### 問四

資料A・Bの理解として最も適切でないものを一つ選べ。

ア Aでは、規則の単純化は現実の複雑さを犠牲にしつつも、制度を可視的かつ検証可能にする条件として肯定されている。

イ Bでは、裁量は規則の外部にある恣意ではなく、規則の目的を具体的事案において読み取る働きとして位置づけられている。

ウ A・Bともに、例外的事案は制度の外側にあるため、制度そのものの見直しとは切り離して考えるべきだとしている。

エ Bでは、裁量が必要であるとしても、その理由が記録・共有・検証可能であることが求められている。

#### 問五

資料Aと資料Bでは、「例外」の意味づけがどのように異なっているか。両者の立場の違いが分かるように説明せよ。(140字程度)

#### 問六

資料A・Bはいずれも担当者の善意や気分だけに依存する運用を退けているが、その理由と、そこから導かれる公平のあり方はどのように異なるか。説明せよ。(170字程度)

## 解答・解説

### 【全体総括】

本章は、制度の公平を「規則」と「裁量」という二つの観点から論じた複合資料である。資料△は、制度の信頼と公平の中心を、公開された規則の一貫運用に置く。個別事情への安易な配慮は、かえって見えにくい不公平を増やすと考え、例外もまた可視化された規則へ回収すべきだとする。

これに対して資料□は、形式的に同じ扱いをすることが、結果としての不均衡を拡大する場合を問題にする。裁量は規則の敵ではなく、規則の目的を具体的事案の中で考え抜く働きだとされ、例外の反復は制度の想定不足を示す徴候として読まれる。

読解の核心は、

- 両者とも善意や気分任せを退けていること
- しかし公平の中心を、△は規則の公開性と一貫性に、□は制度目的に照らした差異への応答に置いていること
- 例外を、△は規則化の課題として、□は制度見直しの契機として捉えていること

を見抜けるかどうかにある。

### 問一

#### 正答：ア

A・Bはいずれも、制度の公平を担当者の善意や感情に委ねるべきではないと考えている。

イはBにやや近いが、△には当てはまらない。

ウは△にも強すぎる。△は「例外を規則へ組み込む」可能性を認めている。

エも両者には当てはまらない。とくに△は、個別納得感を公平の中心とはみなしていない。

## 問二

正答：ア

△は公平の中心を、事前に公開された規則の一貫運用に置く。

□は公平の中心を、制度の目的に照らして必要な違いに応答することに置く。

イは対立を強めすぎで、△も□も規則と裁量の一方だけを絶対視していない。

ウは目的の限定が不正確。

エも□を言いすぎている。□は形式的平等そのものを全面否定していない。

## 問三

正答：ア

□から見れば、△は「同種の事案を同様に扱う」と言うが、何を同種とみなすかにはすでに解釈が入り込む、という批判になる。

イは△の主張に反する。

ウも△に反する。△は善意依存を退けている。

エは一部近いが、「誤差としてしか見ていない」とまで言うのは強すぎる。

## 問四

正答：ウ

△は、例外を規則へ組み込むべきだと考える。

□は、反復する例外は制度設計の想定不足を示すと考える。

したがって、△・□ともに例外を制度の外側へ切り離してはいない。

ア・イ・エはいずれも本文理解として適切である。

## 問五

模範解答

資料△では、例外は制度の外で自由に処理すべきものではなく、条件を可視化して

規則の側へ回収すべきものとされる。これに対し資料Bでは、繰り返し現れる例外は単なる逸脱ではなく、制度が想定していない現実を示す徴候として読まれる。Aは例外を規則化の課題と見なし、Bは制度の目的や設計を問い返す契機として捉えている。

#### 別解例①

資料Aにおいて例外とは、個別判断へ委ねるのでなく、条件を明示して規則へ組み込むべき対象である。他方資料Bでは、反復して現れる例外は偶発的事態ではなく、制度が取りこぼしている現実の表れとされる。Aが例外を規則の整備課題とみるのに対し、Bは制度の前提そのものを見直す契機として重く見る。

#### 別解例②

資料Aは、例外を規則の外で扱えば不透明さが増すため、例外条件自体を公開可能な規則へ組み込むべきだと考える。これに対し資料Bは、ある種の例外が繰り返されるなら、それは制度設計の想定不足を示すとみなす。Aでは例外は規則化されるべき対象であり、Bでは制度の前提を照らし返す徴候として意味づけられている。

#### ■自己採点チェック

- Aを「規則へ回収する例外」として説明できているか
- Bを「制度の想定不足を示す徴候」として説明できているか
- 両者の違いを、単に「厳しい／柔軟」で済ませていないか

### 問六

#### 模範解答

資料Aが善意依存を退けるのは、担当者の親切さが再現も検証もできず、結果を偶然に左右してしまうからである。そのため公平は、誰にも見える規則の一貫運用によって支えられるべきだとされる。これに対し資料Bが善意依存を退けるのは、個別事情への応答が気分任せになれば不透明さが増すからであり、裁量の理由を記録・共有し検証可能にすることで、制度目的に即した実質的公平を実現しようとする。

### 別解例①

資料Aでは、善意に頼る運用は担当者によって結果が変わり、制度を偶然に左右されるものにしてしまうため退けられる。そこで公平は、公開された規則を一貫して適用することに置かれる。他方資料Bでは、善意だけに基づく個別配慮は理由の見えない判断となるため退けられ、裁量の根拠を記録・共有して検証可能にすることで、制度目的にかなう実質的公平を目指している。

### 別解例②

資料Aは、親切的な担当者の有無で救済の可否が決まる状態では制度への信頼が損なわれるため、善意依存を退ける。そこから導かれる公平は、公開された基準に基づく予測可能な運用である。これに対し資料Bは、個別事情への応答が感情的同情にとどまれば不信を招くとして、裁量理由の可視化と共有を通じ、規則の目的に忠実な実質的公平を構想している。

### ■自己採点チェック

- Aで「偶然差」「再現不能性」に触れているか
- Bで「理由の可視化・記録・共有」に触れているか
- 公平の違いを、Aは一貫性、Bは目的適合性として整理できているか

## 【第六問】 合鍵

エレベーターの鏡は、たいていの場所でそうであるように、少しだけ人を痩せて見せる。西村はその前に立ったまま、右手のポケットに触れた。鍵は、薄い封筒に入れてある。封筒は名刺より少し大きいだけで、手の中で持てば紙片に近い軽さしかない。だが、それが軽いこと自体が、彼には妙に不自然に思えた。

その鍵を返すだけだ、と西村は朝から自分に言い聞かせていた。返すだけ。事情は単純である。二週間前、真由から短いメッセージが来た。「合鍵、ポストに入れておいてください」。句点のない、四行だけの文だった。怒っているのかどうかは、その文面からは分からなかった。分からない、ということが、かえって西村には厄介だった。

マンシヨンのロビーは、土曜の午後にしては静かだった。管理人室の窓は閉まっ  
ていて、中に人の気配はない。観葉植物の鉢の土が、最近替えられたばかりらしく  
黒く湿っている。西村はオートロックの前で一瞬立ち止まり、それから暗証番号を  
押した。まだ番号が変わっていないことに、安堵したような、居心地の悪いような  
気持ちになった。

変わっていても不思議ではなかった、と彼は思った。合鍵を返せと言われたのだ  
から、暗証番号がそのままである理由は本来ない。そう考えると、番号が変わって  
いないことに意味を読みたくなる。しかし、意味を読むことそのものが、たいてい  
誤りの始まりでもある。

エレベーターは四階で止まった。廊下の絨毯は以前より色が沈んで見えた。西村  
は角を曲がり、四〇二号室の前まで歩いた。玄関脇に置かれていたはずの細長い傘  
立てはなく、代わりに小さな白い鉢が一つ置かれている。中の植物は葉が厚く、彼  
には名前が分からなかった。名前が分からない、という事実が、そこに自分の知ら  
ない時間が流れていたことを、必要以上に明らかにするように思われた。

ポストに入れるだけなら、ここまで来る必要はなかった。ロビーの集合ポストで

もよかったし、郵送でも済んだのかもしれない。だが西村は、自分がここまで来たことを、たんなる手間の省略だと説明していた。直接この階まで上がったほうが早い、と。実際、そうでもあった。少なくとも、そう言ってしまうえば、それ以上考えなくてすむ。

封筒を出し、宛名のない面を見た。真由の名前を書こうかとも思ったが、やめた。書けば過剰であるような気がしたし、書かなければ素っ気なすぎるようにも思えた。どちらがよいのか分からないまま、彼は封筒を持ち替えた。

部屋の中に人の気配はなかった。気配というものは、たいてい後から説明される。音がしなかったからいけないと思うのか、いないと思ったから音を聞かなかったことにするのか、その順序はしばしば曖昧である。西村は耳を澄ませるふりをしたが、実際には、何か聞こえたときにどうするかを考えていただけだった。

呼び鈴を押す必要はない。メッセージにはそう書かれていない。ポストに入れておいてください、とだけある。にもかかわらず彼は、指を伸ばせば届く位置にある呼び鈴を、視界の隅に入れたまま立っていた。押さない理由は十分にある。押す理由は、あまりはつきりしない。その「あまりはつきりしない」ものの中に、人はとさどきいちばん強い理由を隠す。

隣の部屋のドアが開き、買い物袋を提げた女性が出てきた。西村は軽く会釈をし、女性も同じように会釈を返した。彼女は一瞬、西村の手の封筒を見たようだったが、すぐに視線を外した。視線が封筒に向いたのか、単にその方向に動いただけなのかは分からない。だが、西村はそれだけで、自分がここに立っていることの説明をどこかで求められているような気がした。

彼はあわてずに郵便受けの口を開け、封筒を差し入れた。半分ほど入ったところで、封筒の角が引っかかった。以前、真由が通販の薄い箱を同じところで引っかけて、「このポスト、見た目より入らないんだよね」と笑ったことを、彼は思い出した。笑った、と思う。少なくとも口元は緩んでいた。だが、そのとき何色の服を着ていたのかは思い出せない。記憶は妙なところだけを残す。

封筒を少し押し込み、手を離した。中へ滑り落ちる音はしなかった。途中で止まっているのかもしれないと思い、もう一度触れようとしたが、やめた。触れれば、まるでまだ用事が残っているように見える気がした。

そこで帰ればよかったのだと、のちに思う。だがそのときの西村は、帰るという動作にも少し段取りがあることを忘れていた。振り返り、廊下を歩き、エレベーターを呼ぶ。その一連の動きは、思ったよりはっきりした終わりの形を持っている。終わりは、ときに始まりより手間がかかる。

結局、彼はドアの前に立ったまま、ポケットから携帯電話を出した。新しいメッセージは来ていない。来るはずもない、と彼は思った。鍵を返しに行くこと自体、真由には知らせていなかったからである。知らせなかったのは、知らせるほどのことではないと思ったからだ。あるいは、知らせたうえで返事が来なかったときの方が、今よりいっそう形がついてしまう気がしたからかもしれない。

真由と最後に会った日のことは、驚くほど平坦だった。喫茶店の窓際で、互にコーヒーを半分ほど残し、次の週末には荷物をまとめること、郵便物があれば連絡すること、植物は真由が持つこと、といったことを順に決めた。声を荒らげる場面はなかった。別れ話というものは、もつと輪郭の濃いものだと、どこかで思っていた。だが実際には、輪郭が濃くないことが、そのまま修復の余地を意味するわけでもなかった。

その日、真由は「合鍵、あとでいいよ」と言った。あとで、という言い方が、西村には少しだけ救いに聞こえた。あとで、というのは未来を含む言葉である。未来を含むからといって、未来が開いているとは限らないのだが、その違いは、そのときにはまだよく分からなかった。

廊下の奥でエレベーターの到着音が鳴った。誰かが降りてきて、足音だけが近づき、また遠ざかった。西村は不意に、真由がこの部屋にいないことをたしかめたいのか、いてほしいのか、自分で判別できなくなった。判別できないこと自体が、たぶん答えなのだろうとも思ったが、そういう言い方は少し賢しらに響いた。

彼はようやく踵を返し、廊下を歩き出した。途中で一度だけ振り返った。封筒は見えない。郵便受けの口は元の細い暗がりに戻っている。それが当然なのに、西村は、何か之急に手の届かない場所へ片づけられたような感じを持った。

エレベーターに乗り込み、閉ボタンを押す。扉が閉まる直前、四階の廊下の端で、誰かの傘の先が一瞬だけ見えた。黒かったようにも、濃い紺だったようにも見えた。西村は反射的に「すみません」と言いかけたが、扉はその前に閉じた。今のはただ壁の影だったのかもしれないし、誰かが角を曲がっただけかもしれない。そうでない可能性について考えるのは、ほとんど癖のようなものだと、彼は自分で知っていた。

一階へ着いてロビーに出ると、ガラス扉の外に細かい雨が戻っていた。傘立てから自分の傘を抜く。持ち手の木に、小さな傷がある。いつついた傷なのかは覚えていない。だが、自分のものだと分かるには、それで十分だった。

外へ出てからも、彼はしばらく傘を開かなかった。雨は、開いても開かなくてもよい程度の降り方だった。開かなくてもよい、ということ、開かないほうがよい、ということとは別なのだが、その違いは、たいてい濡れてから気づく。

駅の方へ歩きながら、西村は、真由が今夜封筒を見つけてるのは、帰宅してすぐか、それとも靴を脱いでからか、ということを考えて。考えたところで何も変わらない。何も変わらないことを考えている時間が、いちばん長いのだと、彼はそのとき少しだけ思った。

## 設問

### 問一

本文における西村の「鍵を返すだけ」という自己理解を最も適切に説明しているものを一つ選べ。

ア 西村は鍵を返すという目的以外をほとんど持たずに行動しており、本文はその単純な事実だけを描いている。

イ 西村は自分の行動を単純な用件として説明しようとするが、その説明では収まらない感情や期待が行動の細部ににじんでいる。

ウ 西村は真由との関係修復を明確に望んでおり、「返すだけ」という言い方でその意図を隠している。

エ 西村は真由への未練を完全に自覚しているが、それを認めることを避けるために、用事の形式だけを強調している。

### 問二

本文の叙述に関する理解として最も適切でないものを一つ選べ。

ア 本文では、西村が見聞きした事実と、それに対して彼が与える意味づけとがしばしば近接して描かれている。

イ 西村は、暗証番号が変わっていないことや傘の色などに対して意味を読み取るのが、それが誤りの始まりでもあると自覚している。

ウ 本文は、真由の内面についても西村と同程度に具体的に描いており、両者の認識差を対照的に示している。

エ 西村は、自分の推測が推測にすぎないことを部分的には意識しながらも、それを完全には手放していない。

### 問三

終盤の「傘の先」が一瞬見えた場面の意味として最も適切なものを一つ選べ。

ア 真由が実際にその場にいたことを示す決定的な証拠として置かれている。

イ 西村が真由の存在を期待していたことを、本文が客観的事実として明示するた  
めの場面である。

ウ 事実であった可能性も思い込みであった可能性も残しつつ、西村の知覚が未確  
定なものへ意味を与えようとする傾向を際立たせている。

エ 西村の記憶違いを示し、これまでの叙述全体の信頼性を否定するための場面  
である。

#### 問四

本文の理解として最も適切なものを一つ選べ。

ア 真由との別れは平穏に進んだため、西村の側にはすでに整理された感情だけが  
残っている。

イ 本文は、別れが激しい衝突を伴わなくても、行為の意味づけが後から揺れ続け  
ることを描いている。

ウ 西村にとって重要なのは鍵を返す事実そのものであり、その過程に特別な意味  
はない。

エ 真由の「あとでいいよ」という発言は、関係修復の余地を積極的に示すもの  
として本文で確定的に扱われている。

#### 問五

本文では、西村がたびたび自分の行動に説明を与えようとしている。その説明の  
仕方にはどのような特徴があるか、具体例を挙げながら説明せよ。(130字程度)

#### 問六

この物語において「鍵を返す」という行為は、単なる事務的な用件以上の意味を

帯びている。その意味を、西村の行動や知覚のあり方に触れながら説明せよ。(130  
字程度)

## 解答・解説

### 【全体総括】

本章は、「合鍵を返す」という一見きわめて事務的な行為をめぐり、その行為に付着する未練、自己正当化、知覚の不確かさを描いた物語である。表面上、大きな事件は起こらない。だが西村は、自分の行動を「返すだけ」「手間の省略」と説明しながら、その説明では収まりきれない感情や期待を行動の細部ににじませている。

本文の特徴は、事実と推測がきわめて近接して語られることにある。暗証番号が変わっていないこと、隣人の視線、傘の先の一瞬の影など、西村は未確定なものに意味を読みたくなり、しかもその読みすぎを自分で警戒してもいる。したがって本章では、彼が何を見たか以上に、見たことへどう意味を与えているかが重要である。

読解のポイントは、

- 「返すだけ」という自己理解の不十分さ
- 西村の説明が自己正当化として働くこと
- 未確定な知覚に意味を読み込む癖
- 鍵の返却が単なる用件以上の意味を持つことを捉えられるかどうかにある。

### 問一

#### 正答…イ

アは誤り。本文は「返すだけ」という西村の説明の外側に、感情や期待がにじむように描いている。

ウは言いすぎで、「関係修復を明確に望む」とまでは確定できない。

エも強すぎる。西村は未練を完全に自覚しているとは言いがたい。

したがって、自分では単純な用件として説明しつつ、その説明に収まらないものが細部に現れているとするイが最も適切である。

## 問二

正答…ウ

アは本文の叙述の特徴を捉えている。

イも本文通りである。

エも適切で、西村は推測にすぎないことを意識しながら、なおそこに意味を読み込もうとする。

ウだけが不適切で、本文は真由の内面を西村と同程度に具体的には描かない。真由は主として西村の知覚や推測を通してしか現れない。

## 問三

正答…ウ

アは誤りで、傘の先は決定的証拠としては扱われていない。

イも強すぎる。西村の期待を示唆はするが、本文がそれを客観的事実として明示しているわけではない。

エも行きすぎで、叙述全体の信頼性を崩すための場面ではない。

したがって、未確定な知覚に西村が意味を与えようとする傾向を際立たせる場面とみるウが最も適切である。

## 問四

正答…イ

アは誤りで、整理された感情だけが残っているのではない。

ウも誤りで、その過程に特別な意味が付着していることが本文全体で示されている。

エは言いすぎで、「あとでいいよ」が修復の余地を確定的に示すとは本文は述べない。

よって、激しい衝突がなくても意味づけが後から揺れ続けることを描くとするイが最も適切である。

## 問五

### 模範解答

西村の説明には、行動の感情的意味を縮減し、事務的・合理的な理由へ置き換えようとする特徴がある。たとえば四階まで上がったことを「手間の省略」と捉え、知らせなかったことも「知らせるほどではない」と処理する。しかし叙述は、その説明の脇から居心地の悪さや期待をにじませ、本人の自己理解よりも行動のほうが多くを静かに語ってしまう構造を作っているのである。

### 別解例①

西村は、自分の行動を感情から切り離し、実務的な理由へ言い換えることで心の揺れを小さく見せようとしている。だが、その説明が繰り返されるほど、かえって彼のためらいや期待が透けて見えてしまう。つまり説明は感情を消すためのものだが、その働きに完全には成功していない。

### 別解例②

この説明の特徴は、行動の意味を事後的に整える点にある。西村は「早いから」「知らせるほどではないから」と理由を置くが、それらは行動の前提というより、行動のあとで自分を納得させるための言葉に近い。本文は、その後付けの理屈と行動の生々しさのずれを描いている。

### ■自己採点チェック

- 西村の説明が「合理化」であることに触れているか
- 具体例として「四階まで上がる」「知らせない」を挙げているか
- 叙述がその説明をはみ出すものを示していると書けているか

## 問六

### 模範解答

鍵を返す行為は表面上は事務的な返却だが、西村にとっては関係の終わりを自分の手で確定させる動作でもある。だから彼は返すだけだと説明しつつ、暗証番号や呼

び鈴や室内の気配に意味を読み、行為に残る余地を探してしまう。鍵は単なる物ではなく、未練や確認不能な期待をなお結びつけていた関係の名残であり、その返却は用件であると同時に別れの実感へ触れ直す行為なのである。

#### 別解例①

鍵を返すことは、住居への出入りの権利を失うという実務的意味だけでなく、関係に残っていた最後の通路を閉じるような意味を持つ。だから西村は、それを単なる用件と捉え切れず、暗証番号や呼び鈴や気配に余分な意味を読み込んでしまう。返却は、終わりを現実の動作に変える行為である。

#### 別解例②

この物語で鍵は、二人のあいだに残っていた曖昧な接続を象徴している。返却によってその接続は形式上は断たれるが、西村の意識はなおその周辺をさまよう。したがって鍵を返すことは、物を戻すことではなく、関係がすでに終わっていることを身体的に引き受ける儀式のような意味を帯びている。

#### ■自己採点チェック

- 鍵を「終わりの確定」と結びつけて説明できているか
- 西村が暗証番号・呼び鈴・気配に意味を読もうとすることに触れているか
- 鍵を単なる物でなく、関係の名残として捉えられているか

## 【第七問】 条件のかたち

私たちは日常の中で、しばしば「これができれば十分だ」とか、「それがなければ無理だ」といった言い方をする。こうした言い方は自然で分かりやすいが、その分だけ、条件どうしの関係を曖昧にしたまま話を進めてしまいやすい。何かが起こるために必要な条件と、それだけあれば起こるといえる十分な条件とは、本来別のものである。にもかかわらず、この二つはしばしば混同される。

たとえば、「集中できる静かな環境がなければ勉強は進まない」と言うとき、そこで述べられているのは、静かな環境が勉強のための必要条件である、という理解である。だが、静かな環境があることは、直ちに勉強が進むことを保証しない。疲労や意欲、課題の理解、時間の使い方など、他の条件が欠けていれば、静けさはただ静かなだけの空間にとどまる。

逆に、「この教材を使えば成績は伸びる」といった言い方には、一つの条件を十分条件のように扱う危うさがある。優れた教材であることは学習を支える重要な条件かもしれない。しかしそれだけで学習成果が決まるなら、同じ教材を使う者のあいだに生じる差を説明できなくなる。ある条件が大きな役割を果たすことと、その条件だけで結果が決まることとは違う。

必要条件と十分条件の混同は、単なる言葉の誤りにとどまらない。私たちは何かを説明するとき、できるだけ少ない条件で語りたがる。理由を一つに絞れば、理解した気になりやすいからである。だが現実の出来事は、複数の条件が重なって起こることが多い。そこでは、ある条件が欠ければ成立しないが、それだけでは成立しないということが珍しくない。

ここでさらに厄介なのは、ある条件がある場面では必要条件のように見え、別の場面ではそうでなく見えることである。たとえば、試験に合格するために「長時間の勉強」が不可欠だと考える人もいるだろう。しかし、それは学力水準、科目の特性、学習効率、試験形式によって意味が変わる。同じ条件が、どの範囲で語られて

いるのかを確かめなければ、その条件づけはたちまち雑になる。

また、必要条件が満たされていても結果が生じなかった事例を見たとき、人はしばしば、その条件そのものを否定してしまう。「静かな環境でも勉強が進まない人がいた。だから静かな環境は必要ない」という推論がその例である。だが、これは必要条件の理解としては誤っている。必要条件とは、それがないと成立しないという意味であって、それがあれば必ず成立するという意味ではないからだ。

同様に、ある結果が生じた事例を見て、そのとき存在していた条件をすべて必要条件だとみなすのも危うい。ある合格者が毎朝早起きしていたからといって、早起きが合格の必要条件だとは限らない。そこには、その人にとってたまたま有効だった条件や、別の条件でも代替可能な条件が含まれているかもしれない。現実の事例から条件関係を読み取るには、単に共起したというだけでは足りない。

条件を正しく考えるとは、何か一つの鍵を探し当てることではない。むしろ、どの条件が「なければならぬ」のか、どの条件が「あれば足りる」といえるのか、また、どの範囲でそのことが成り立つのかを、丁寧に切り分けることである。条件の整理は、説明を単純にするためではなく、単純化しすぎることを防ぐために必要なのである。

分かりやすい説明は、しばしば条件を減らす。だが、よい説明とは条件を減らした説明ではなく、条件どうしの関係を取り違えない説明である。必要なものを十分だと誤り、十分なものを必要だと誤るとき、私たちは説明を手に入れたつもりで、実際には説明を失っている。

## 設問

### 問一

本文の主張を最も精確に再構成しているものを一つ選べ。

ア 現実の出来事は多くの条件が重なるため、必要条件と十分条件の区別は理論上は重要でも、実際にはほとんど役に立たない。

イ 分かりやすい説明は条件を減らして示す点で有効であり、多少の混同があっても理解を促すかぎり問題は小さい。

ウ 条件を正しく考えるとは、一つの決定的要因を見つけるのではなく、必要条件・十分条件・適用範囲を切り分けることである。

エ 必要条件と十分条件の混同は、主として事例不足から生じるため、より多くの具体例を集めれば自然に解消される。

### 問二

本文の立場からみて、最も妥当でないものを一つ選べ。

ア 静かな環境が勉強の必要条件であるとしても、それだけで勉強が進むとは限らない。

イ ある教材が成績向上に寄与するとしても、その教材だけで結果が決まるとは限らない。

ウ ある合格者が早起きをしていたなら、早起きは合格の必要条件とみなしてよい。

エ ある条件がある場面で重要に見えても、別の場面で同じ意味を持つとは限らない。

### 問三

本文の論理展開を最も適切に示すものを一つ選べ。

ア 条件の教科書的定義 ↓ 日常言語の否定 ↓ 単一原因説の採用 ↓ 例外の排除

イ 必要条件と十分条件の区別 ↓ 一条件説明の危うさ ↓ 範囲の確認 ↓ 事例からの誤推論の批判

ウ 条件の複雑性 ↓ 条件整理の放棄 ↓ 個別事例重視への転換

エ 必要条件の説明 ↓ 十分条件の無効化 ↓ 具体例の一般化 ↓ 結論の保留

#### 問四

本文の立場から最も適切でない推論を一つ選べ。

ア 必要条件が満たされていても結果が生じないなら、他の条件が欠けていた可能性がある。

イ ある条件が結果に大きく関与していても、それだけで結果が決まるとは限らない。

ウ ある結果が生じた場面に存在した条件は、その結果の必要条件として扱うことができる。

エ 条件関係を考える際には、その条件がどの範囲で成り立つかを確かめる必要がある。

#### 問五

本文において、必要条件と十分条件の混同が「単なる言葉の誤りにとどまらない」とされるのはなぜか。説明せよ。(150字前後)

#### 問六

本文の立場に立ち、具体的な事例から条件関係を読み取る際に注意すべきことを説明せよ。(150字前後)

## 解答・解説

### 【全体総括】

本章は、必要条件と十分条件の違いを出発点としながら、私たちが日常の説明の中でどれほど容易に条件関係を取り違えるかを論じた文章である。筆者はまず、「これがなければ無理だ」と「これがあれば足りる」とが本来別の意味を持つことを確認する。そのうえで、現実の出来事は多くの条件の重なりによって成立するため、一つの条件だけで説明したくなる傾向そのものが誤解を生みやすいと述べる。

さらに本文は、条件の意味が場面や範囲によって変わることに、必要条件が満たされていても結果が生じない事例があること、逆に結果と共起した条件を必要条件と誤認しやすいことを具体例で示している。したがって本章で求められるのは、条件を増やすことではなく、**条件どうしの関係を正確に切り分けること**である。

読解のポイントは、

- 必要条件と十分条件の違いを取り違えないこと
  - 一条件説明の魅力と危うさを捉えること
  - 条件の「範囲」が変われば意味も変わることを理解すること
  - 具体例から一般的な条件関係を読む際の慎重さを押さえること
- にある。

### 問一

#### 正答：ウ

アは誤り。本文は区別が実際に役立たないとは言っていない。むしろ、単純化しすぎる説明を防ぐために必要だとしている。

イも誤り。多少の混同で済むとは考えていない。

エも不適切で、事例不足だけが原因ではなく、人が少ない条件で理解したがる傾向そのものが論点である。

よって、条件を一つの鍵としてではなく、必要条件・十分条件・適用範囲の切り分

けとして捉えるウが最も適切である。

## 問二

正答…ウ

ア・イ・エはいずれも本文の趣旨に沿う。

ウは誤り。ある合格者が早起きをしていたことは、早起きがその人の学習に有効だった可能性を示すにとどまり、合格の必要条件だとはいえない。本文は、共起した条件をそのまま必要条件とみなす危うさを批判している。

## 問三

正答…イ

本文は、まず必要条件と十分条件の区別を示し、その後で一条件説明の危うさを述べ、さらに条件の適用範囲の確認、事例からの誤推論の批判へと進む。  
したがってイが最も適切である。

ア・ウ・エはいずれも、本文にない否定や放棄、保留を含んでおり不適切である。

## 問四

正答…ウ

アは本文通りで、必要条件が満たされていても他条件が欠ければ結果は生じない。

イも本文通り。

エも本文の重要点である。

ウだけが誤りで、結果と共に存在した条件をそのまま必要条件とすることはできない。本文はまさにその短絡を批判している。

## 問五

模範解答

必要条件と十分条件の混同は、説明のしかたそのものを誤らせるからである。人は一つの条件で結果を語れば理解した気になりやすく、そのため、欠ければ成立しない条件と、それだけで成立させる条件とを取り違える。すると、複数の条件がどう重なっているかを見失い、現実の出来事を単純化しすぎた説明や判断へと導かれやすくなる。

### 別解例①

必要条件と十分条件を混同すると、単に言葉づかいを誤るだけでなく、出来事の説明の組み立て自体がずれてしまう。人は少ない条件で原因を示したがるため、必要な条件を決定的条件のように扱い、逆に、ある条件があれば足りる場合も見落としやすい。その結果、条件どうしの重なりを捉え損ね、理解したつもりで誤解を深めてしまうのである。

### 別解例②

この混同が重大なのは、私たちが説明を分かりやすくまとめようとするほど、条件関係を誤って固定しやすいためである。必要条件を十分条件のように扱えば、一つの条件だけで結果が出ると思い込み、十分条件を必要条件のように扱えば、たまたま共起した条件まで不可欠だと誤認する。そこから説明全体の精度が崩れ、判断も粗くなっていく。

### ■自己採点チェック

- 混同が「説明や判断の誤り」にまで及ぶと書けているか
- 一つの条件で語りたがる傾向に触れているか
- 必要条件と十分条件の双方の取り違えに触れているか

## 問六

### 模範解答

具体的事例から条件関係を読むときは、結果と一緒に現れた条件をすぐ必要条件や十分条件と決めつけないことが大切である。その条件が欠ければ本当に成立しない

のか、別の条件で代替できないのか、またその事例がどの範囲まで当てはまるのかを確かめねばならない。単なる共起を条件関係へ短絡させない慎重さが求められるのである。

### 別解例①

具体例を読む際には、そこで見えた条件をそのまま一般的な条件関係へ広げないことが重要である。ある結果と共に存在した条件が、たまたまその人に有効だっただけなのか、他の条件でも置き換え可能なのか、どの範囲で成り立つのかを区別して考える必要がある。事例は手がかりにはなるが、それだけで条件の位置づけは決まらないのである。

### 別解例②

事例から条件関係を考えるなら、結果と同時に見えた条件を直ちに必要条件や十分条件へ振り分けられないことが要る。その条件が欠ければ結果は生じなかったのか、別条件でも同じ結果へ至れるのか、同じ説明が他の場面にも通じるのかを吟味しなければならぬ。共起したという事実だけで条件の役割を確定しない態度が必要になるのである。

### ■自己採点チェック

- 共起と条件関係の区別ができているか
- 代替可能性や適用範囲に触れているか
- 具体例を一般化しすぎる危険を書けているか

## 【第八問】 見えているものの外側

人は、目の前にあるものから判断しなければ生きていけない。見えている表情、聞こえている言葉、記録された数字、制度に示された規則、その場で確認できる事実――私たちはそれらを手がかりにして、何が起きているのか、何をすべきかを決めている。判断のためには、どこかで足場を定めなければならない。すべてを保留し、あらゆる可能性を同時に抱えたままでは、日常の行為は一步も進まないからである。

この意味で、判断とはつねに縮約である。現実には見えない事情が折り重なっている。それでも、ある人の言葉を「怒っている」と受け取り、ある数字を「増えている」と読み、ある規則を「ここではこう振る舞うべきだ」と理解することで、私たちはその都度世界を扱える大きさへと縮めている。判断のためには、省略が要る。すべてを見渡してから決めるのではなく、ある部分を先に切り出し、その切り出しを足場にして先へ進むのである。

しかし、判断に必要なこの省略は、同時に見落としを生む。怒っているように見える表情が、単なる疲労や戸惑いのあらわれであるかもしれない。増えた数字が、改善や悪化の直接の証拠ではなく、別の条件の変化を反映しているだけかもしれない。規則に従った判断が、公平に見えて、実際にはある人々に繰り返し不利を与えているかもしれない。私たちは見えているものから判断するしかないが、見えているものだけで足りるとは限らない。

ここで厄介なのは、見えていないものを重視しようとする、今度は何を根拠に考えればよいのが曖昧になりやすいことである。見えない事情、語られていない背景、数字の背後にある条件、制度からこぼれ落ちる事情。そうしたものの存在を意識することは大切である。だが、それを意識するあまり、目の前の事実が持つ重みまで失ってしまえば、判断は別の仕方で崩れる。見えているものだけでは足りないが、見えていないものばかりを想定すれば、どこにも足場がなくなる。

この二重の困難は、他者を理解しようとするときにも、社会の制度を考えるとときにも、同じ形で現れる。たとえば、誰かの行動を見て、その人がどういう意図を持っているかを推測する場合を考えてみよう。私たちは、言葉の調子や表情、行動の順序から、その人の内面を読み取ろうとする。そこにある程度の推測がなければ、他者との関係は成り立たない。だがその推測は、しばしばこちら側の期待や不安を混ぜ込んだものでもある。人は他者を読むとき、他者の内面だけでなく、自分自身の見方もまた読んでしまっている。

制度の場合も似ている。制度は、見える基準を求める。なぜなら、見える基準がなければ、誰に対してどのような判断がなされたのかを点検することができないからである。規則、手続き、記録、数値。これらは制度の透明性を支える重要な装置である。だが、制度が扱う現実とは、しばしばその装置からはみ出す。そこで制度は、見える基準を守りながら、見えにくい事情にどう応答するかを問われる。見えるものだけで運用すれば、説明はしやすいが取りこぼしが増える。見えないものに大きく応答しようとするれば、今度は説明の共有が難しくなる。制度の難しさは、この両立しがたさの中にある。

私たちは、ときどき「本当のところはどうなのか」と問いたくなる。数字の背後にある真実、表情の奥にある本心、制度の外にある実情。だが、「本当のところ」という言い方そのものが、あたかも見えているものの奥に、ひとつの完全な実体が静かに隠れているかのような印象を与える。しかし実際には、私たちが「本当」と呼ぶものもまた、別の角度から見れば途中の理解にすぎないことがある。見えているものが不十分であるのと同じように、見えていないものを想像して作った説明もまた、不十分でありうる。

だから必要なのは、見えているものを信じないことでも、見えていないものばかりを信じることもない。むしろ、いま自分が何を足場にして判断しているのかを意識し、その足場がどこまで届き、どこから先は届いていないのかを知ることである。数字を見るなら、その数字が何を数えていて、何を数えていないのかを考える。

言葉を聞くなら、その言葉が何を言っていて、何を言いそびれているのかを考える。規則に従うなら、その規則が何を守ろうとしており、何をこぼしうるのかを考える。判断の誠実さとは、判断を止めることではなく、自分の判断の届く範囲を見誤らないことにある。

このとき重要なのは、判断の修正可能性を残しておくことである。人は一度何かを判断すると、その判断に整合する証拠ばかりを拾いやすい。怒っていると思えば、その人の沈黙まで怒りの証拠に見え、優れていると思えば、失敗さえ例外に見えてくる。制度も同じで、一度定めた基準は、それに合う事例を集めやすくなる。だが、修正の余地を残さない判断は、やがて現実を読むためでなく、現実を押し込めるための枠になってしまう。判断は、ある瞬間には必要である。しかし、その必要性が、そのまま絶対性になるわけではない。

では、判断を修正可能なものとして保つにはどうすればよいのか。第一に、自分が用いている基準や概念を言葉にしてみることである。何をもって「不誠実」と感じたのか、何をもって「改善」と読んだのか、どの条件を重要と見たのか。基準が言葉になれば、それは他者に開かれる。開かれた基準は、批判もされうるが、批判されうるということ自体が、その判断を閉じたものにならない。

第二に、例外に対する態度を変えることである。例外はしばしば邪魔者のように扱われる。せつかく分かりやすく説明したのに、それに当てはまらない事例が現れると、人はその事例の方を軽く見たがる。しかし、例外は説明を壊すものではなく、その説明がどこまで有効かを教える境界線でもある。ある例外が偶然の揺れにすぎないのか、それとも説明の前提そのものを問い返しているのかを見極めることは容易ではない。だが、例外をただ排除して済ませるとき、私たちはたいいてい、自分の理解の限界ではなく、例外の方に責任を押しつけている。

第三に、他者の判断が自分と異なるとき、その違いを単なる誤りとして処理しないことである。もちろん、誤りはある。だが、同じ事実を前にして違う判断が出るとき、そこには多くの場合、見ている条件の違い、重く見ている価値の違い、想定

している範囲の違いがある。判断の違いは、しばしば世界の見え方の違いを含んでいる。違いをすべて相対化してしまえば何も決められないが、違いを即座に無知や悪意へ還元してしまえば、判断そのものが硬直する。

結局のところ、判断とは、見えているものの外側を想像しつつ、それでもいま見えているものといったん足を置くことでしか成り立たない。片足だけで立つような、不安定な営みである。両足を確かな地面に置いてから判断する、ということはおそらくできない。私たちはつねに、不十分な足場の上で決めている。だからこそ、決めることの責任は、決めたことを変えない責任ではなく、必要なら決め直す責任でもある。

見えているものだけでは足りない。だが、見えていないものまで見たふりをするとき、判断はもつと危うくなる。よい判断とは、すべてを見通すことではない。

自分が何を見ていて、何をまだ見ていないかを忘れないことである。

## 設問

### 問一

本文の主張を最も精確に再構成しているものを一つ選べ。

ア 人は見えているものだけで判断せざるをえない以上、見えていないものへの配慮は判断を不安定にするだけであり、できるだけ抑えるべきである。

イ 判断には見えているものを足場とする省略が不可欠だが、その足場の限界と修正可能性を意識し続けることが、判断の誠実さを支える。

ウ 見えているものの背後には常により本質的な真実があるため、判断は表面の事実よりも見えない事情の想像を優先して組み立てるべきである。

エ 判断の困難は、主として情報不足から生じるものであり、十分な情報が集まれば見えているものと見えていないものの対立は解消される。

### 問二

本文の立場からみて、最も適切でないものを一つ選べ。

ア 判断とは、現実の複雑さをそのまま保持することではなく、ある部分を切り出して扱える大きさへ縮める営みである。

イ 見えていない事情の存在を意識することは重要だが、それによって見えている事実の重みまで失えば、判断の足場が崩れうる。

ウ 例外的な事例は説明を乱すため、まずは説明の外側へ置いてから一般的理解を組み立てるほうが、判断の精度を保ちやすい。

エ 他者の判断が自分と異なるとき、その違いには見えている条件や重く見ている価値の差が含まれていることがある。

### 問三

本文の論理展開を最も適切に示すものを一つ選べ。

ア 判断の必要性 ↓ 判断の縮約性 ↓ 見えるものと見えないものの両義性 ↓ 修正可能性と例外への態度 ↓ 判断の誠実さ

イ 事実の重視 ↓ 想像力の危険 ↓ 制度批判 ↓ 主観的判断の擁護 ↓ 結論の保留

ウ 他者理解の困難 ↓ 制度運用の不可能性 ↓ 判断停止の勧告 ↓ 例外の排除 ↓ 相対主義の承認

エ 見えないものの重要性 ↓ 見えるものの否定 ↓ 判断の全面的再構成 ↓ 真実の不可知性 ↓ 個人責任の免除

#### 問四

本文における「例外」の位置づけとして最も適切なものを一つ選べ。

ア 例外は、説明の一貫性を保つためにできるだけ早く除外すべきノイズとして扱われている。

イ 例外は、説明がどこまで有効かを示す境界線であり、単なる邪魔者として処理すべきではないものとされている。

ウ 例外は、一般的判断を停止させる決定的反証であるため、一つでも見つければ説明全体を放棄しなければならない。

エ 例外は、見えていない事情を想像する力が十分であれば、最終的には例外でなくなるものとして描かれている。

#### 問五

本文において、判断が「縮約」であるとはどういうことか。また、その縮約が必要である一方で危うさも伴うのはなぜか。説明せよ。(160字程度)

#### 問六

本文の立場に立ち、「判断の誠実さ」とはどのようなものかを説明せよ。見えていないもの・見えていないもの・修正可能性の關係に触れながら述べよ。(200字程度)

## 解答・解説

### 【全体総括】

本章は、判断という営みが、見えているものだけでは足りず、しかし見えていないものばかりを想定しても成り立たないという二重の困難の上にあることを論じた総合長文である。筆者はまず、判断のためには現実をそのまま抱え込むのではなく、扱える大きさへ切り出す「縮約」が必要だと述べる。これは行為や制度の運用に不可欠な足場である。

しかし同時に、その縮約は省略を伴うため、見落としや固定化を生む危うさも持つ。そこで本文は、他者理解・制度運用・数字の読解といった場面を横断しながら、見えているものの重要性と、その限界への自覚とを両立させようとする。さらに終盤では、判断の修正可能性、例外の位置づけ、他者との判断の違いへの向き合い方が論じられ、判断の誠実さとは「決めないこと」ではなく、「何を足場にし、何がまだ見えていないかを忘れないこと」だと結ばれる。

読解の核心は、

- ・ 判断が必要であることと危ういことを同時に捉えること
  - ・ 「見えているもの」と「見えていないもの」のどちらか一方へ偏らないこと
  - ・ 例外を、説明を壊す邪魔者ではなく、説明の限界を示す契機として読むこと
  - ・ 修正可能性が判断の弱さではなく、誠実さの条件だと理解すること
- にある。

### 問一

#### 正答…イ

アは、見えていないものへの配慮を抑えるべきだとしており、本文に反する。本文は、見えていないものの存在を意識することを重要だと述べる。

ウも誤りで、見えない事情の想像を表面の事実より優先せよとは言っていない。

エも不適切で、判断の困難を単なる情報不足へ還元していない。

したがって、見えているものを足場にしつつ、その限界と修正可能性を意識することを述べたイが最も適切である。

## 問二

### 正答…ウ

アは本文の「判断とはつねに縮約である」という部分に対応する。

イも本文通りである。

エも終盤の議論に一致する。

ウだけが不適切で、本文は例外を単に外へ置くべきだとはしていない。むしろ例外は、説明がどこまで有効かを示す境界線でもあるとされる。

## 問三

### 正答…ア

本文は、判断の必要性から始まり、判断が現実の縮約であること、その縮約の危うさ、見えるものと見えないものの両義性、さらに修正可能性と例外への態度へ進み、最後に判断の誠実さへ到達する。

したがってアが最も適切である。

イ・ウ・エはいずれも、本文にない極端な立場や否定を含んでいる。

## 問四

### 正答…イ

本文は、例外を説明の外へ捨てるべきノイズとは考えない。

アは誤り。

ウも誤りで、一つの例外があれば直ちに説明全体を放棄すべきだとはしていない。

エも本文にない。

よって、例外を説明の有効範囲を示す境界線として読むイが最も適切である。

## 問五

### 模範解答

判断が「縮約」であるとは、現実の複雑さをそのまま抱え込まず、ある部分を切り出して扱える大きさへ縮めることを指す。そうしなければ私たちは決めたり動いたりできないからである。しかし、その切り出しは背景や見えていない事情の省略を伴うため、判断の足場になる一方で、見落としや固定化も生みうる。必要だからこそ、その限界を忘れない姿勢が要る。

### 別解例①

本文でいう「縮約」とは、世界のすべてを同時には扱えない以上、判断のために必要な要素を先に取り出し、そこを足場にして決めることである。この省略がなければ行為は進まない。だが、省かれた背景や条件は見えなくなりやすく、一度置いた足場がそのまま絶対視されれば、誤認や硬直を招く。縮約は前進の条件であると同時に、見落としの入口でもある。

### 別解例②

縮約とは、複雑な現実を判断可能な形へいったん整理し直すことである。人は表情や数字や規則のような見える部分を先に掴まなければ、何も決められない。その意味で縮約は不可欠である。だが同時に、それは見えない事情や別の可能性を外へ押しやる働きも持つ。本文は、判断に必要なこの整理が、そのまま判断の危うさにもつながると捉えている。

### ■自己採点チェック

- ・ 縮約を「一部を切り出して扱うこと」と説明できているか
- ・ その必要性を、判断や行為の成立条件として書けているか
- ・ 危うさを、見落とし・固定化・省略の観点から述べられているか

## 問六

### 模範解答

本文における判断の誠実さとは、見えているものを足場にして決めつつ、その足場が何を照らし何をまだ照らしていないかを忘れないことである。見えていない事情を無視せず、しかしそればかりを想像して足場を失うのでもなく、いまの判断が届く範囲を意識することが求められる。さらに、一度下した判断を絶対化せず、例外や他者の異なる見方を通じて必要なら決め直せるよう修正可能性を残しておくことが、その誠実さの中心にある。

### 別解例①

判断の誠実さとは、見えている事実だけで十分だと思いつまず、同時に見えていない事情を見たふりもしない態度である。本文は、判断には足場が要る以上、見えていないものから始めるほかないとするが、その判断がどこまで届き、どこから先は省略されているのかを自覚し続けよと求める。したがって誠実さとは、判断を止めることではなく、例外や他者の異論を手がかりに、自分の基準や結論を必要に応じて組み替えられる開き方のことである。

### 別解例②

本文のいう判断の誠実さは、「よく考えてから決める」という一般論よりも厳しい。見えている表情や数字や規則を用いなければ判断は始まらないが、それをそのまま全体とみなせば危うい。だから、見えているものを根拠にしながらも、見えていない部分が残っていることを自覚し、例外が現れたときには説明の限界として受け止める必要がある。誠実さとは、判断を維持する強さではなく、必要ならその判断を改める責任まで引き受けることなのである。

### ■自己採点チェック

- 見えているものを「足場」として捉えられているか
- 見えていないものへの配慮と、想像しすぎる危うさの両方に触れているか
- 修正可能性を、判断の弱さではなく誠実さの条件として説明できているか

## おわりに

この冊子では、抽象的な評論、統計や制度を扱う文章、物語文、二資料比較など、いくつか異なる種類の文章を並べました。けれども、その狙いは一つです。

それは、ただ「答えを当てて」ことではなく、どのような言葉を足場にして読み、どのような条件を見落とし、どこで判断を急ぎすぎるのかを、自分の中で少しずつ意識できるようにすることです。

選択問題も、記述問題も、今回はかなり難しく作ってあります。すぐに解けなかった問題、読んでもなお曖昧に思えた問題も多かったかもしれません。

しかし、それは決して悪いことではありません。むしろ、「すぐには決めきれないもの」をきちんと抱えながら読み進めること自体が、深い読解の力につながっていきます。

現代文は、ときに不親切な科目のように見えます。けれども、本当は、人がどのように言葉を使い、どのように思い込み、どのように他者や世界を理解しようとするのかを、静かに見つめる営みでもあります。その意味で、読解とは単なる受験技術ではなく、ものを見る力そのものを整えていくことでもあるでしょう。

ここまで取り組んできたあなたは、すでにかなり骨のある文章と向き合ってきました。簡単ではなかったはずですが、それでも読み進め、考え、言葉にしようとしたことを、まずはしっかり誇ってよいと思います。お疲れさまでした。

この冊子が、次に文章を読むとき、あるいは自分で何かを考え、言葉にするときの、足場の一つになれば嬉しいです。